

100Kg程度である。これは、孤立した reef が多く、漁具の破網による防止策として操業前魚探による、魚群および海底地形調査を行なった後、灯船の位置をきめ、点灯するなど細心の注意を払ったが、reef 多く、あぐり網を有効に使用することが出来なかった。しかし、餌料魚（主に *Spratelloides japonicus*）の潜在量は非常に多いことが認められたので、漁獲方法によっては、相当量の漁獲が可能と考えられる。

む す び

各調査地点における餌料魚の分布および灯火による集魚状態を考察すると、餌料魚は、相当豊富で、単位当り漁獲量をみると、あぐり網では、15~150Kg、船曳網では、10Kg、地曳網では、25Kg~1000Kgの結果を示し、また集魚灯（水中灯）により集魚可能である。

漁獲された何れの種も魚体は小さく、網目に刺さり、または、抜けるものが多く、集魚量に対して漁獲量は少なかった。

餌料採捕に使用した網目は、25節であるがより小さな目合のものを使用すれば残網率は良いと考えられる。

この海域のカツオ餌料魚として可能であろうと考えられる種は、カタクチイワシ科の *Stolephorus devisi*, *Thrissina baelama*, *Stolephorus bataviensis*, ウルメイワシ科の *Spratelloides japonicus*, *Spratelloides delicatulus*, ニシン科の *Harengula ovalis*, タカサゴ科の幼魚、アジ科、トウゴロウイワシ科等あげられるが、ベラ科の幼魚（現地名 Marari）についても検討する必要がある。

生簀網による *Thrissina baelama* の蓄養試験では、6日後約40%、18日後約20%の生残率を示している。また活魚艙内蓄養試験は、C. Lambert その他の調査地点で実施したが、*S. devisi* は、才1日で約50%、才2日には、全体の25%位しか残らない。漁具は、あぐり網を使用しているので、条件として良い、しかし、漁獲した直後のものを直ちに船内蓄養したことと、曳船用に使用した生簀の規模、構造にも問題があった。

5. パプア , ニューギニア カツオ餌料調査報告

見 崎 平 三

Live-Bait research for skipjack in Papua and New Guinea
by Heizou MISAKI

1. 調査期間

昭和45年8月29日~9月29日

2. 調査海域

ラバウル、カビエン、マダン

3. 餌料対象魚

ターライ：現地で一番多く見られるもので内地で“こはだ”、館山付近では“さつば”と呼ばれている。魚体は1～1.2匁（約5cm）が多く、マダン方面では2匁（約9cm）位のものも見られた。

デビスアンチョビー：内地の“セグロイワシ”に似ており、魚体は透明で横に薄い青い線が通っている。内地の newborn と同じようなもので、魚体は1～1.2匁で大きなものは卵を持っていた。

バッター：魚体は1匁位で、頭が固く、うろこも強く、鰹の餌には余りよくないが畜養には適すると思う。

4. 餌料漁獲試験

第1回目ラバウル港外マトピー部落沖にて集魚灯使用による船曳網（シラス網）を2回操業する。第1回目操業は失敗、第2回目操業にてバケツ2杯分漁獲、魚種はデビスアンチョビーが主でバッター若干混る。23時活魚槽に入れるも翌朝までに死滅多くバケツ1杯分残る。

第2回目ラバウル港外マトピー部落沖にて地曳網を行う、漁獲はバケツ約120杯分で魚種はターライが多くバッターが若干混る、朝から夕方まで生簀に畜養し活魚槽に移すも、生きたものバケツ27杯分位残る。

第3回目ラバウル港外マトピー部落沖にて地曳網を行うも海底障害物にて網破れ漁獲少なくバケツ5杯分を生簀に畜養する。魚種はターライ、バッター。

第4回目ラムバー岬（ガゼル半島）2000m沖にてあぐり網を行う、漁獲はデビスアンチョビーでバケツ10杯分これを活魚槽に移す。

第5回目ラムバート岬沖2000mにてあぐり網操業するも漁獲悪くバケツ3杯分で魚種はデビスアンチョビー。

第6回目ラムバート岬沖2000mにてあぐり網操業するも漁獲失敗バケツ1杯分のデビスアンチョビーを漁獲する。魚体は以前のものより少し大きく熟卵を持っていた。活魚槽に移す。

第7回、第8回と前回同様の餌料漁獲試験を行う。

全8回の餌料漁獲試験により漁獲した餌料魚を活魚槽に移すも、毎日50%以上死滅する、これは新餌のためと思われた。

5. 鰹漁獲試験

第1回目ガゼル半島西方30哩海域、鳥付餌持群間断なく見えるも、日中餌付悪く、日没ごろ餌付きよくなり、かつお（4Kg～5Kg）100尾、きめじ（4Kg～5Kg）20尾漁獲する。餌は戸田

港で活けたセグロイワシ(2匁~2匁半)の生残ったものバケツ・杯分とマトピー沖にて漁獲したターライ10杯分を使用した。

第2回目鰹漁獲試験はガゼル半島北側ラムバート沖岬環礁入口の灯台よりCo.10⁰に航走し、ニューブリテン島付近の調査を行う。鳥付餌持群を多く見るも日中は曳繩には掛るが餌付きなし、日没時より餌付あり、漁獲はかつお(4Kg)60本、きめじ(4Kg)3尾で、この時使用した餌料はラムバート岬沖合で漁獲したデビスアンチョビー、及びバツアーを船内畜養したものをを使用した。

6. 所 感

ラバウル湾内マトピー部落及びその反対側ではターライが最も多く、デビスアンチョビー(畜養には弱いと思われるが、鰹餌料としては最適種である)は比較的少なく、他にバツアー(畜養には良いが、餌料としては劣ると思われる)が見られる。その他カピエン・マダン地方に於いてもターライが主である。デビスアンチョビーはラムバート岬に多くみられる。

これらの餌料魚を漁獲する場合、沿岸を利用する場合は現地人との交流協調が最も重要であると思われる。又は沿岸漁民の刺激を避けるためラバウル湾口沖合にて小型あぐり網を使用して漁獲することも一方法と思われる。いずれにしても、現地人との交流協調及び漁具・漁法が今後の課題である。

漁獲餌料の畜養に関しては、畜養する適地の調査(陸上及び海上の交通の便のよいところ)が必要である。

又、最近は鰹船の大型化が進み、南方方面での餌の補給が可能となれば、サンゴ海迄も南下して未開発漁場を開発することも可能と思われる。

今後も引続き積極的な調査研究により、鰹漁業の餌料並びに燃油・食料等の補給地が開発され鰹漁業の一層の発展を望むものである。

6. かつお節業界から見た南方カツオについて

村松直衛(焼津鰹節水産加工協同組合)

Southern skipjack viewed from Katsuobushi market.

by Naoe MURAMATSU

カツオ節業界から見た南方カツオについての私見を二、三のべさせていただきたい。カツオ節については味が非常に問題になる。カツオ節の味を一番貴重視してその研究をやっている味の素とか旭味、キッコーマンとかの調味料の会社が一番カツオ節の味を研究している。たまたま11月18日から味の素も本出し風味調味料を売出した。そこで、それにカツオ節を使うわけである